

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

東南アジアに住む預言者一族 各界で活躍するサイドたち

新井和広(慶應義塾大学商学部准教授)



サイドがシンガポールに建てたバー・アラウィー・モスク
(筆者撮影)

マレーシアの主要な宗教といえばイスラムである。その預言者であるムハンマドの子孫がマレーシアに住んでいる。そう聞くと当たり前のように思われるかもしれないが、彼らの多くは19世紀から20世紀中頃までに、南アラビアのハド라마ウト地方(現イエメン共和国)から東南アジア島しょ部に移住してきた人びとの子孫である。預言者一族はエジプトやイラク、シリア、イランなど、中東の主要な地域にもたくさん住んでいるのに、東南アジアに移住してきたのが、普段は名前も聞かないような地方出身者であるのは面白い。

彼らは東南アジアでは「サイド」と呼ばれている。マレーシアやシンガポールで名前の最初に「Syed」という単語がついていれば預言者一族だと考えていい。同じ一族の人々はインドネシアにも住んでおり、親戚同士で国をまたいで暮らしていることもめずらしくはない。また、ハド라마ウトからインドネシアに来て、そこからマレーシアに移住したり、その逆の移動をしたりすることも普通に行われている。

預言者ムハンマドはアラブだったので、東南アジアに住んでいるサイドもアラブということになる。しかし、現在では最初の移民から数世代を経ているので、ほとんどはマレー人、ジャワ人、プギス人、華人、インド系など、東南アジア在住者との混血である。第二次大戦前の東南アジアには日本人も大勢住んでいたの、日本の血が混じっている人もいる。一見華人とマレー人の混血だろうという姿をした人が「私は預言者の子孫だ」と言ったとしても驚くにはあたらない。そ

れに彼らのほとんどは生まれも育ちも東南アジアで、居住地の国籍を持っている。父祖の故郷であるハド라마ウトを訪れたことがない人もたくさんいる。

彼らがどの程度「アラブ」というアイデンティティを持っているのかは分からない。しかし、国民国家という枠組みを考えた場合、アラブであることを強調することは外来の人間であることを宣言するのに等しいという微妙な問題がある。確かなことは、サイドはマレーシア社会のいたるところで活躍しているということである。上を見れば、ブルリスのラジャはサイドのジャマルッライル家であるし、1999年から2008年までマレーシアの外務大臣を務めたハーミド・アルパール氏もサイドである。お隣のインドネシアでも、1990年代から2000年代にかけて、アリー・アラタス、アルウィ・シハブとサイドの外務大臣が2人続いた。そのほかにも学者や実業家など、アラブ系が活躍している分野は広い。フォーブス誌が行っている世界長者番付で、マレーシア第7位のサイド・ムフタル・アルブハーリー(Syed Mokhtar AlBukhary)氏もサイドである。

しかし、預言者一族であることが最も意味を持つのは宗教界においてであろう。サイドたちは東南アジア各地でモスクや宗教学校を建てたりして、宗教活動の振興に務めた。過去にはジョホール王国で大ムフティー(イスラム法に基づいて様々な問題に対して法的見解を出す人)をしていた人物もいるし、ジャワ島やシンガポールではサイドの聖者の墓が参詣者を集めている。

もし、取引先で受け取った名刺に「Syed」と書かれていたら、「預言者ムハンマドの子孫ですか?」と訊いてみると話がはずむかもしれない。

< 筆者紹介 >

1968年、埼玉県生まれ。ミシガン大学近東研究学科博士課程修了。博士。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教を経て現職。専門はインド洋におけるアラブ移民とその子孫の歴史。主にインドネシアとイエメンのハド라마ウト地方で現地調査を行っている。最近ではイスラムの商品化、特に預言者ムハンマドの子孫の商品化に興味を持っている。日本マレーシア学会運営委員。